

---

# 俺が神と出会ってから

ヒリュー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺が神と出会ってから

### 【Nコード】

N6656X

### 【作者名】

ヒリユ一

### 【あらすじ】

俺が車に轢かれてから目覚めたら目の前に神様！？どうにも信じきれないが力を見せられたら信じるしかない新しい世界に転生させてくれるらしいが下手をすると失敗！？うまくいったと思ったら、<sup>ゼウス</sup>神が<sup>ゼウス</sup>ついてきた。先が思いやられるが、まあどうにかなるだろう。

初でつたない文章、ご都合主義、作者の趣味満載ですが見てくださればうれしいです

ダメ出し、意見はジャンジャンいって下さるとうれいす

それではよろしく願ひします。

あと、いくつか掛け持ちしてるからかなり遅い更新です

## 物語の始まり

突然だが、今俺は、神様の前にいる。

自分でも何を言っているのか理解できない。

でもそうなのだ、どうしてこうなったか、思い出してみようと思っ。

今朝俺は、いつもど通りの朝を過ごした。

メシを食べ、着替えて、髪型を整えて、学校に行った。

そしてやはり、いつもど通りの学校だった。

違っていたのは帰り道だ。

横断歩道を渡っていた俺は、運悪く車に轢かれた。

そりゃあもうグシャツと、一瞬にして意識が持ってかれたよ。

そして目が覚めたと思ったら自称神の前だ。

ここまでをまとめるとこうなった原因は車の運転手じゃねーかああ

！！！！

絶対に殺してやる！！！！

「いやいや、もう君には殺せないよ」

「えっ」

「えっ、じゃないよ声に出てたからね、思い出してみようと思っべ

らいからね」

「マジで？」

「マジマジ」

神って意外と気さくなんだ。ってじゃなくて！

「声に出てたってマジ？」

「マジマジ、真剣と書いてマジ」

うっわー俺はずかしー声に出てたとか穴があつたら入りたい。

「はいそこお、顔赤くしてバタバタしない汚れるでしょうが」

「うるせー！恥ずかしいんだよ、つかさっきからなんだよそのしゃ

べり方女かよ!」

「神に性別はないよ、女にしようとするればできるけどね」

「できるのかよ!」

「できるよ、全知全能の神だからね」

「名前は! 言えよ!」

「確かあ、ゼウスだったかな」

「はあ!？」

「だーから、ゼウスだよ」

俺ってそんな偉いのと話してたのか。でも!

「証拠を見せてみるよ証拠を!」

「しょうがないなあ」

ゼウスはおもむろに手を振りかざした。すると奴の周りに雷が落ち  
てきた

「すげえ」

俺は思わずつぶやいていた、ゼウスはきをよくしたのか、

「じゃあじゃあこんなのはどう?」

と言いつつゼウスは右手を突き出してきた、突然俺の周りに突風が  
起きた。

「うわっ!」

「それそれえー」

ゼウスは続けて左手も突き出した、急に風が強まった。

「わかったわかったもついい!」

「そう、じゃあやめるね」

「お前が神だつつつう事はよくわかった」

「やっとわかってくれたあー?」

そつえば

「俺って死んだのか?」

「死んだよー、体を見ればわかるんじゃない?」

そう言われてから体を見て気がついた

「体が…透けてる!」

体が半透明だった

「てことは、ここは天国？」

「ちがうよー、ここは狭間、現世とあの世のね」

「で何で俺はここにいるんだ？」

「それはあ、暇だったからあ転生でもさせてあげようかと思ってさ」

「そんな軽い理由でかよ！」

「で、転生っていうのはね」

「聞けよ！」

「やだ！」

「そんなに全力拒否しなくても、はあ、なんか疲れた」

「露骨な呆れてますって言う感じの仕草してないで話をきいてよ」

「わかったよ、聞いてやるよ」

せめてもの仕返しに露骨にいやな顔をしてやった。

「でね、転生ってゆうのはね、別の世界に生まれ変わることなんだけど」

この顔に対してノーリアクション！？

ものすごい嫌な顔だと思っただけどなあ。

「いいことづくめなんだけど、ちよつとだけ欠点があってね」

「欠点？」

「そう、欠点。」

「どんなのだよ」

「まず、生まれ変わる世界が選べないんだよね」

「選べないってどんな感じに？」

「例えば、前と同じような世界になったり、荒廃した世界だったり、すごく技術が進歩してたりね」

「ん？同じような世界ってどういうことだよ？同じじゃねーのかよ」

「そこがもう一つの欠点、二度と同じ世界には転生できないんだよ」  
ん？ちよつとまでよじゃあ

「輪廻転生はないのか？」

「輪廻転生もあるにはあるけどそれを行うには、何百何千万年と待

つことになるしそれに」

「それに？」

「絶対に出来るとは、限らない最悪魂が無くなるよ」

「最悪じゃねーか！」

ヒンドウー教だが、キリスト教だが、

どこの宗教だか忘れたけど輪廻転生を信仰してる宗教の奴ドンマイ

「そっ、転生だって僕の気が向かないとやんないしねー」

「もしかして、俺って超ラッキー？」

「いまさら気付いたのー、で転生するの？しないの？」

「うーん」

「よくかんがえてねー？」

どうするか、へたをすると荒廃した世界、

でもうまくいけばいい世界、ここは一つやってみるか

「転生するよ」

俺がそう言うときゼウスは顔をパアッと喜色一面にすると

「ほんとに！やったー、テンションあがるなー」

「マジマジ、ちゃっっちゃとやってくれよ」

「それじゃあいつくよー」

ゼウスはつつむき何かを唱えだした

3分後

「なあなあ、まだかよー？」

「準備OKーいくよー、それっ」

「えっちよ、なに抱きついて…」

視界が光に包まれた





## 物語の始まり（後書き）

これから頑張っていこうとおもっています。

かきわすれましたが主人公は俺こと風洞龍です

ここまで名前忘れてたおれって

## とりあえず人物紹介（前書き）

まだ2人しかいないけど人物紹介

こつこつと1話は1話のまえにやるんだろつな  
とか若干の後悔

## とりあえず人物紹介

風洞 龍

読み：ふうどう りゅう

愛称：リユウ

年齢：15歳 高校1年生

見た目：ふつーの学生、肩ぐらいまでの少し長い黒髪、そこそこのルックス中の上、上の下ぐらい身長は175cmとそこそこ

服装：服は学ランをボタン全部開けて着ている学ランの下はTシャツ、靴は革靴、服装に関しては今後変更あるかも

性格：基本受け身の人生、なるようになるさ的な思考、どちらかというと人を引っ張る側

その他：死ぬ前は、そこそ女子からの人気はあった程度はバレンタインに本命を1〜2個貰うぐらい頭の切れは良く、成績はいい方運動神経は抜群ずば抜けている。女子からの人気の原因は大体ここから。

ゼウス

読み：ぜうす

愛称：ゼウス

年齢：不明

見た目：女に見える、腰の辺りまである白髪、ルックスは上の中ぐらいと可愛い方身長は150ぐらい大体、リユウのアゴの下に入るくらい

服装：白いワンピースのようなものを着ている裸足、首にネック

レスを付けているこちらも今後変更あるかも

性格：マイペース、自由奔放という言葉がぴったりな感じなんでも楽しければOKな感じ人に引っ張ってもらおう側

その他：色々とぶっ飛んだことができる。手をかざすと雷が落ちたりする、他にも色々できる理由は、至極単純に神つまりゴッドだから

## とりあえず人物紹介（後書き）

ここにあること

とくに服装、その他は多分変更したりする

人物紹介は3人新しい人物が出てきたらやる  
予定でいます

## 転生後の世界（前書き）

もしかすると

新しいキャラが出てくるかも

ちなみに（）これの中はその人物の心情です

あと「なんでだよ／＼」

とかの／＼は照れている時です

## 転生後の世界

そよ風が俺の頬を撫でていく

風を感じるってことは転生が終わったのか？

視界の光が収まってきた

「ん、ここは？」

そう、呟くと

「ここは、草原だねー」

ゼウスの声が聞こえる、

「ってお前はいつまで抱きついてるんだ！いい加減離れる！」

「だってー君の匂いをかいでると安心するんだもん」

「顔を擦りつけるな！そういうことをするなら女になれ、何が悲しくて男かもしれない奴と抱き合わなきゃならねんだよ」

「むー、わかったよ女になってあげるよいくよー」

ん、まてそれはそれでまずいぞ

「やっぱちよつま…！」

ゼウスの体が輝くと、ウエストが引き締まり、胸が膨らみ、全体的に丸みを帯びた

「えへへーこれでいいでしょ、えいつ」

「お前胸が当たってる！離れる」

ゼウスを引き剥がすと地面に座らせた

「まったく、ところでなんで付いてきた？」

「それはー、君の事が気に入ったからだよ」

「んなつ」

「ところでさー、君の名前を教えてよ」

「風洞 龍だ、リュウって呼んでくれ。お前は、下の名前なんて言うんだよ」

「レディアだよ、ゼウスレディア、ゼウスでもレディアでもすきなほうでよんでね」

「ふーん、結構可愛らしい名前なんだな」  
「リュウのこそカツコイイよ」  
「なんだか、褒められるのって、てれるな」  
「まあとりあえず、むこうのほうに見える町目指そうぜ」  
「そうだねー」

しばらく歩いていると突然女に話しかけられた

「あんた達って、旅人かなんか？そんな丸腰で歩いてるとモンスターに襲われた時大変だぜ」

「ご忠告ありがとう、あんたの名前は？」

「レーナ」クラシス、レーナって呼んでくれ」

「レーナか、俺は、風洞 龍、リュウって呼んでくれ。んでこっちが」  
「ゼウス」レディアだよー、ゼウスでも、レディアでも、どっちで呼んでくれてもかまわないよー」

「リュウにゼウスか、お前達も、アルジオの町に行くのか？」

「アルジオの町？」

「あっちに見える町だ、良かったら一緒に行かないか？」

「俺は別にいいけど、ゼウスは、どう思うよ？」

「むー、僕も別にいいよ」

(何で若干不機嫌なんだこいつは？)

「ああ、よろしくな、レーナ」

「よっ、よろしくたのむ／＼」

「（今の笑顔は、反則だと思っうなー、僕は）」

「（何で、レーナは顔を、赤くしたんだ？もしかして、今の笑顔で俺に惚れちゃったとか！？いやそれはないか、初対面だしな）」

「まっまあモンスターが出たら任せてくれ、こう見えてもハンターなんだぞ私は」

「へー、じゃあよろしく頼む」

「まかせておけ」フンス

「ちよっとー、僕を仲間外れにしないでよー」ウルウル



「ああ、ごめんな」  
「（涙目のこいつもなかなか可愛いな）」  
「そんな軽くあしらってー」  
「ともかくそろそろ行こう」  
「レナの言う通りだな、いつまでも拗ねてないでいくぞゼウス」  
「ふんっだ」

1時間後ぐらい

「ようこそ、アルジオの町へ」  
「ほら着いたぞ、いい加減起きろゼウスそして降りろ」  
「うにゅー、やだーリュウの背中気持ちいいんだもん」  
俺はゼウスをおんぶしていた  
「ほら、ゼウス降りなよ、あんましリュウを困らせるな」  
「はっはっは、親子か何かですかあなたかたは？」  
「いやちがいますよ！」（この門番余計なことを！）  
「そうか、私たちは、親子に見えるのか／＼」（そうかそうか、  
てことは私とリュウが夫婦か、悪くないな）  
「僕は、子供じゃないよー」（むー、なんだか悔しいな）  
「なら、旅人パーティーですか？」  
「ええ、そうです」（パーティーってなんだ？）  
「今日のご宿はお決まりですか？」  
「特に決めてないよー」  
「では、大通りをまっすぐ行って二つ目の十字路を右に曲がったと  
ころにあるスズラン亭にしてはどうでしょう安いですし」  
「どうする、ゼウスとレナはどうする？」  
「僕は別にーリュウと一緒にならどこでもいいよ」  
「私も別にそこでいいぞ安いらしいしな」（私も別にリュウと一  
緒なら／＼って何を考えてるんだ／＼）  
「じゃあそこにするか、門番さんありがとうございます」

「いやいや当然のことです」  
「よし、じゃあしゅっぱつしんこー」タタッ  
「走るな走るな、こけるぞ」  
「あっ」ドテン  
「いわんこつちやない、大丈夫か？」  
「リュウー、擦りむいたよおー、いたいよおー」ウルウル  
「たく、しょうがねーな、背中乗れよおぶってやるから」  
「うん」グスグス  
「（いいなー、おんぶ羨ましいなーって私はまた／＼）」  
「はあ、じゃあ行こうぜレナ」  
「あっ、ああそうしよう」

転生後の世界（後書き）

なんだかテンプレどおりというか  
お約束というか  
ダメ出しがあればぜひぜひ  
お願いします

スズラン亭にて（前書き）

前回のレナのフラグ建築は雑だった  
以後気をつけよう

## スズラン亭にて

――スズラン亭・桜の間

「ふいーついたー、ゼウスもすっかり寝ちゃったな」（名前和風で部屋は洋室つて）

「そうだな」（こうしてみるとかなり美少女だなこの子）

「疲れてるだろうし、俺がなんか買ってくるよ」

「そうか、ではお言葉に甘えて休んでいるとしよう」

「おう、じゃちよつといつてくるな」

テクテク、ガチャ、バタン

「リュウは、行った？」

「起きてたのか!？」

「そんなことは置いといて、ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「おいとくのか、で聞きたい事ってなんだ」

「あさ、レナってリュウの事好きなの？」

「なっ／＼まあ好きか嫌いかと聞かれればゴニョゴニョ」

「え？なに聞こえない」

「……ダ／＼」

「えっ？」

「好きだと言っている!／＼ゼウスの方こそどうなんだ!？」

「僕は勿論好きだよ、大好き、愛してるって言ってもいいくらい」

（じゃないと気まぐれで転生させてついてきたりしないよ）

「そんなにきつぱりと言えるほどののか」

「そりゃー勿論、仕草、言葉づかい、笑顔どれもこれも大好きだよ、初めて見たときから、もう一万年と二千年前からぐらい」

「長いな!」

「でで、レナはどこに惚れたの？」

「私はあの初めて見たときに向けられたあの笑顔かな」

「へー、笑顔だけで惚れちゃうなんて、軽い女だねえー」ニヤニヤ

「違う／＼！笑顔だけで好きになったのは、初めてだ！一目惚れだよ！／＼」

「まあ、僕もそんなもんだし、人のこと言えないか」

「ゼウスもか、それよりこちらからも聞きたいことがたくさんあるんだ」

「なにになに？」

「まずな……………」

S i d e リ ユ ウ . . . . .

「さて、買い出しに行つてくると言ったものの金がない」

「どうしたもんか」

そう呟きながら、トボトボ歩いていると路地裏から

「やめてください！人を呼びますよ！」

「だれもこねーよこんなところ」

「そうそう、諦めた方がいいぜーねーちゃん」

(路地裏でこれつてなんてベタな) ハア

「お前ら何してんだ」

「あぁん！なんだあんちゃん」

「痛い目会いたくなかつたらすつこんでな」

(セリフまでなんてベタな)

「やめてあげるよ、嫌がつてんだろ」

「どこがだよ、なあねーちゃん」

「お願いします助けてください！」

「こいつー！」

「やめとけよつと」

女の方を向きこちらに背を向けた男B(仮)の背中にひざ蹴りをかました

「がっ」

膝をつき倒れこんだ男B(仮)の背中を思い切り踏みつける

「ゲふっ」

「このやるー！」

「つっこんできた男A（仮）に足掛けをかましこけたところをやはり踏みつけてやった2、3回くらい」

「がっ」

「たく、こういうのはどこにでもいるんだな」

「ありがとうございます、あのお名前は？」

「風洞 龍てゆうんだ、リュウって呼んでくれ、お前はなんてゆうんだ？」

「わたくしは、アリア＝ガイストと申します、アリアとお呼びください／＼」

「アリアかよろしくな、ところでなんでフードを被ってるんだ？」

「いや、あの、それは…」

「外しちゃえよそんなフード、ほら」バサッ

「え、ちよつと、あっ」

「角…？」

「ああ、見られてしまいましたか、わたくし魔族と人間のハーフなんです」

「魔族？そんなのもあるのか、そういやレナもフード被ってたな、向こうは耳が生えてるとかかな」

「別にいいんじゃないの、角くらい、美人なんだからもっと自信持てよ」

「そ、そうでございますか／＼」

「おうって、俺買い出しの途中だった」ハア

「そうですね、ではお詫びと言っては何ですが、これをどうぞ差し出されたのは、ビン3つとハムみたいなものだった」

「回復薬とハムでございます」

「ありがとな」ニコッ

「いえ／＼こちらこそ／＼」

「でも、ハムなんてどう調理しよう」

「では、わたくしがして差し上げましょうか？」  
「本当か!？」  
「えっ、ええ本当でございます」  
「じゃあ、よろしく頼む」アクシユ  
「わかりましたわノノ」アクシユ  
「じゃあ、後でスズラン亭にきてくれないか？」  
「スズラン亭なら、わたくしのいえですよ」  
「ほんとか、じゃあいつしよに行こうぜ連れが待ってるんだ」  
「わかりましたわ」

-----スズラン亭・桜の間

ガチャ、バタン

「ただいまー」  
「おじゃまいたします」  
「おかえりー、リュウー」トテトテ、ダキッ  
「ゼウスいきなり抱きつくなノノびっくりするだろ」  
「だってー、リュウと1時間も離れてたんだよー」グリグリ  
「鼻をこすりつけるな、たかだか1時間だろ、離れれば頭撫でてやるから離れる」  
「じゃあ離れる、撫でて撫でてー」パッ  
「はあ、ほれこれでいいか」ワシャワシャ  
「うにゅーノノ」  
「ところで、レナはどこだ？」  
「レナならリビングみたいなのどこにいるよ」  
「そっか、ああ、アリアも上がってくれ」  
「は、はい、わかりましたわ」  
「レナー帰ったぞっと」  
「リュウか、お帰り」



「ただいま」

「リュウそつちの人は誰だ？」

「ああ、アリアだ」

「アリア〓ガイストと申します、アリアとお呼びください」

「私はレーナ〓クラシスだ、レナと呼んでくれ」

「んで、あつちのが」

「僕はゼウス〓レディア、ゼウスってよんでねー」

「僕？ゼウスさんは男性なのですか？」

「うっん、女だよー」

「でリュウ、なんで買い出しに行ったら女を連れて帰ってくるんだ  
ピキピキ

「そうだよー、僕というものがありながらー」プンプン

「えーと、こうなった理由はだな」

.....説明中.....

「つてなことがあつたんだ」

「カッコイイー、さすがは僕のリユウだねー」

「お前のじゃねーけどな」

「で、お礼として料理を作りに来たと」

「そついうことだ、なっアリア」

「そつでございます、では早速作らせていただきますね」トトッ

.....晩飯.....

「豪華だな」

「少し奮発してしまいましたわ」

「僕はうれしいけどねー」

「とりあえず、たべてしまおう」

「そつだな、じゃあ」

「.....いただきます.....」

.....食事中.....

「そういえばさー、レナって獣人族ビーストと人のハーフなんだって」モグモグ

「物を食べながら話すな、ってマジで!？」モグモグ

「うん、レナが言ってたもん」

「じゃあさ、耳とか生えてたりすんのか？」

「耳は生えてないぞ、尻尾が生えてる」

「見せてくれよ」

「無駄だよー、さっき僕が何回頼んでも見せてくれなかったんだ」

「リュウが言うならいいぞ／＼」

「じゃ見せて見せて」

「ほら」ピヨコン フリフリ

「さわっていい?」

「だめだ!触られるとなんかぞわっとする」

「ふーんじゃあやめとくか」

「そうしてもらえると非常に助かる」

「わかったよ、あーうまかった、ごちそうさま、アリア」

「おそまつさまです」

「僕もごちそうさまー」

「私もだ」

「わたくしが、かたずけておきますので、くつろいでいてください」

「リュウーここに座ってー」

「なんだ、ゼウス?」ストーン

「えい」スポン

「膝枕つてのはフツー逆じゃないか？」

「いいのいいの、僕がされたいんだからー、あとあと頭撫でてー」

「はいはい、わかったよ」ナデナデ

「うにゃー」(気持ちいいな)

-----10分後

「うー」「スヤスヤ」

「寝ちゃったか」ナデナデ

「そのようだな」

「レナか、先に寝てていいぞ、ゼウスは俺が見とくから」

「では、わたくしは帰りますね」

「おー、今日はありがとなー」

「ええ、ではさようなら」

「じゃなー」

「じゃあ私は先に寝ているぞ」

「おう、おやすみー」

スズラン亭にて（後書き）

冒険してないよこれ

次は冒険しよう

そうしよう

初めての戦闘(前書き)

今回は冒険するかも  
しないかも

## 初めての戦闘

.....スズラン亭・桜の間

「んん」

朝日がまぶしい、いつの間にか寝ていたようだ

「ゼウスは？」

隣で毛布を被って寝ている

「毛布？レナがかけてくれたのか？」

なんだかいい匂いがする

「ん？起こしてしまっただか？」

レナがキッチンから顔を出してきた

「おはよう、別に大丈夫だ」

「そうか、とりあえず、ゼウスをおこしてくれないか？」

「ん、わかった。ゼウスー、おきろー、朝だぞー」

「うにゅ、おはよう」

「おはよう」

「朝ごはんが出来たぞー」

「ほら、レナが呼んでるから、いくぞー」

「うん」

「それじゃ」

「.....いただきます」

.....食事中

「あのー、ひょうは、ひやにふるのー？」モグモグ

「なに、言ってるかわかんねーし、きたねーから食いながらしゃべ

んな」パクパク

ゴクン「あのさー、今日は、なにするの？」

「とりあえずは、武器を揃えて、隣町を目指す」

「そうだ、ゼウスにリュウはなしがあるんだが」

「なんだ？」

「パーティを組まないか？」

「パーティ？」

「つてなーに？」

「しらないのか、簡単にいえば一緒に行動するグループみたいなものだ」

「組むとなんかあるのー？」

「色々あるが一番でかいのは、宿屋などの割引だな」

「どうやって組むんだ？」

「申込書を点在する関所のどこかに提出だな」

「申込書ってどこでももらえるのー？」

「それも関所でだ」

「んー、まあ別にいいぜ、ゼウスはどうだ？」

「僕も別にいいよー、ライバルはいた方がいいしねー」

「何のライバルだよ。まっ、つーわけで俺らは構わないぜ」

「関所は隣の途中にあるからな、そこで申請をしよう」

「じゃそれで決まりだな」

.....  
ウエボンシヨツブ 武器屋 にて

「そついや、レナの武器はどんななんだ？」

「私のか？私のは、ボウ・カテゴリ 弓種類 の ハンターズ・ボウ 狩人の弓 だ」

「ハンターズ・ボウ 狩人の弓？」

「ああ、バリスタ 重豪弓 と ライトボウガン 軽量弓 の中間ぐらいの武器だ」

「同じ種類カテゴリの武器でも色々あるんだな」

「ああ、たくさんあるぞ」

「リュウー、僕これにするー」トテトテ

「なんだこれ？」

「ロッド・カテゴリ 杖種類 の マジシャンズ・ロッド 魔術師の杖 だな」

「クリスタルロッドってゆるんだよー」

「ゼウスも決めたか、リュウはなににするんだ？」

「俺はこれにしようかなー」ガチャ

「ソード・カテコリ 剣種類 の ワンハンド・ソード 片手剣 か」

「これを二本とこれを一本」ズツ

「三本もか！しかも最後のは デュアルハンド・ソード 両手剣 より重い バスタード・ソード 重大剣 をか！」

「おっちゃんこれ売ってくれ」

「あいよー、クリスタルロッド一つにアイアンソード二本にアロン  
ダイト一つだね」

「ゼウス、金を頼む」ヒソヒソ

「わかったよー」ヒソヒソ

「代金は16500ギルだね」

「はいよ」ジャラ

「お預かり、20000ギルだね、お釣り、3500ギルだね」

「あんがとさん」

「装備もそろえたいし隣町に行こうか」

「そうだな」

「-----町の入り口

「じゃあしゅっぱーっ」

「待ってくださいーい！」ダダダ

「ん？」

「はあはあ、良かった間にあいましたわ」

「アリアか、どうしたそんなに慌てて」

「あの、もしよろしければ、わたくしもついていってもよろしいで  
しょうか？」

「大歓迎さいいよな二人とも」

「僕も賛成だよー」

「私もだ」

「っーわけだ、これからよろしくな」

「よろしくお願いいたします」ペコリ



……隣町への道・小高い丘

「んー、見晴らしがいいねー、ねっリュウ」

「気持ちいいのはわかるがはしゃぐなよこけるぞ」

「うわっ」

「ほら、言ったとおりだろ、だいじょうぶかー」タタタッ

「リュウ、転んだんじゃないよアレだよアレ」

「ん？うわっ、猪？サイ？」

ゼウスの目線の先には、猪とサイを混ぜたみたいなモンスターがいた

「あれは、ルーキーオークっていうモンスターだ」

「ルーキーオーク？」

「ああ、二足歩行する前のオークだ」

「簡単に倒せるぞ、こう剣を水平に構えてだな」

（へーなんか、野球のバントみたいだな）

「こうしていると向こうから勝手に突っ込んできて自滅する」

言ってるそばから突っ込んできた

「ブモー!!!」

（きもっこいつきめえー!）

「ブ…モオオ」

（ほんとに自滅したよ）

「きゃあ!」

「どうしたアリア」

「い、いえ少し血がかかってしまいました」

見るとアリアのローブに血がかかっていた

「次の町に着いたら新しいのを買っつか」

「え、ええ、その時は選んでくださいませんか？／＼」

「俺がか？別にいいけど、俺センスないぞ」

「かまいませんわ」

「そか、じゃあ、そうしよう」

「えー、アリアだけずるいー、僕のも買ってよー」グイグイ

「わかった、わかった買ってやるから袖を引っ張るな」

「買ってくれるの？じゃあさ僕のも選んでよ／＼」

「いいぞー、別に選ぶくらい」

「リュウ、私のも買ってもらえないか？」

「いいぞ、仲間はずれは良くないしな」

「そのお、できればわたしのも…」

「選んでやるよしっかりな」

「そうか、ありがとう／＼」

「まあ、とりあえず、全部次の町に着いてからだな」

## 初めての戦闘（後書き）

ネタがないので

次は人物紹介や変更点それから、その他の  
説明をしようかと

パーティ結成！！（前書き）

ついにパーティ結成

あくまでもパーティでハーレムじゃないです

諸事情により

人物紹介等を変更して

ストーリーを進めます

そして、いまだに地の文の入れ方が掴めない

## パーティ結成！！

-----イルジオの関所

「なあレナ、どこで貰えばいいのかわかんないから、申込書を貰ってきてもらえるか？」

「ん。わかった、ちょっと待っててくれ」タタタッ

「リュウウー、疲れたから抱っこおー」トテトテ

「お前結構身長あるから出来ないな」

「むー、じゃあじゃあ、これでいいでしょ」キュウウン

ゼウスがひかりだした

光が収まるとゼウスが一回り小さくなっていた

「こんなことに力を使うな」（こいつの力、便利だな）

「小さくなったんだからー、抱っこしてー」

「後でしてやるよ、あとでな」（小さいな、140cmぐらいか？）

「ゼウスさん？淑女は人前では、男性にベタベタしないものですよ」（なぜ、小さくなられたのでしょうか？魔法かなにか、なのでしょう？）

「僕は淑女じゃないもんねー、だからー、リュウウー抱っこおー」

「そんな甘ったるい声をだすな、宿屋に着いたらいくらでもしてやるから」

「ほんとにいいー？じゃあ僕いい子だから我慢するうー。えらいでし

よー」エへへ

「ああ、いい子、いい子」

「じゃあさ、褒めて、褒めてー、そして頭撫でてー」

「おー、えらいえらい。ゼウスはいい子だな」ワシヤワシヤ（体が小さくなったら、精神まで幼くなった？）

「えへへー／／」

「ほれ、もうおしまいだ。レナが戻ってくるまでおとなしくしてろ」  
(いや、前からこんなんか)

「もう少しくらい、いいじゃんよー」ブーブー

「持って来たぞ、全員ここの欄に名前を書いてくれ」「ピラッ

「ここでいいのか？」

「いや、リュウが一番上だ」

「なんで？」

「リュウにはリーダーになって貰う」

「おつ、俺がかあ！？なんでまた？」

「唯一の男だし、頼りになるからだ」

「納得いかないけど、しょうがないかあ」カキカキ

「じゃあ、僕はリュウの下ー」カキカキ

「では、次はワタクシでよろしいですか？レナさん」

「ああ、構わない」

「では遠慮なく」カキカキ

「最後は、私だな」カキカキ

「意外と簡単なんだな」

「そうだな、じゃあこれを提出してくるからもう少しだけ待っててくれ」

「おつ、わかった」

-----1分後

「承認が終わったぞ。これがパーティ証だ」サッ

「へー、人数分あるんだな」

「ああ、各自で一つずつ持ってくれ」

「わかった、何から何までありがとな」

「いやいや、私から提案したことだからこの程度当然だ」

「そうか、まっありがとな、ほれ、ゼウスお前のだ、絶対に失くすなよ」

「失くさないよー、僕とリュウとが仲間だって証だからね」

「そんなこと言ってもらせるなんてなんだかうれしいな」

「何回でも言ってもあげるよー、だって僕はリュウが大好きだからね」

「お前何言ってるんだよノノそういうのは好きなやつに言え」

「僕は本当にリュウの事が好きだよ？」ダキッ

「はいはい、からかうのもいい加減にしる。そして離れる」グググ

「やだね離れないもん」

「ほら、ゼウスさん、リュウさんが困ってるらっしゃるから離れて差しあげなさい」ヒョイッ

「うー、はーなーせー」ジタバタ

「ありがとう助かったよ、アリア。ってお前意外とちからあるのな」

「ええ、武器がロッド・カテゴリ杖種類メイスの重鈍杖とゆう金属製の杖ですから

「金属製ってことはやっぱり重いのか？」

「ええ、とてもデュアルハンド・ソード両手剣の軽い方ぐらいでしょうか」

「結構重いんだな」

「これを使って敵に殴りかかるので嫌でも筋力がつきますよ」

「意外とエグイ戦い方だな」

「リュウいつまで喋ってるんだ、出発するぞ」

「リュウー、早く行こうよー」

「悪い悪い、今すぐ行くよ。アリア行こうぜ」

「ええ、わかりましたわ」

「早くー」

「そんなに急かすなって」

パーティ結成!! (後書き)

次こそは

人物紹介&その他もろもろです、です。



## 第2の町・ウィルディア（前書き）

恒例のごとく

グダグダの文

支離滅裂な文です

そして、宿屋から出ません

アリアとレナが

ほとんど空気です

## 第2の町・ウィルディア

.....ウィルディア入口  
ここでもやはり、門番が声を掛けてくる

「ウィルディアの町にようこそ」

「あの、この町の宿屋でお勧めのものがあつたら教えてくれないか？」

「いいですよ、えーと価格の安さでいえば民宿サキ、品質でいえばアースト・ゲイジ、バランスでいえばレオルホテルですね」

「だってよ、どこにする？」

「僕は、どこでもいいよ、リュウとくつろげれば」

「そうか、アリアとレナは？」

「わたくしもどこでもいいですわ」

「私はなるべくお金を残しておきたいから民宿サキがいいと思う」

「じゃあ民宿サキの場所を教えてくださいでもいいですか？」

「サキは大通りをまっすぐ行って、行き止まりのところを右に曲が

って二つ目のところですよ」

「ありがとうございます」

「じゃ、行くう」

「レッツゴー」

.....民宿サキ・カウンター

「お部屋はどこにいたしますか？」

「何があるんすかね？」

「松・竹・梅・桜があります」

「んー、何となく桜でいいか」

「ありがとうございますでは案内いたします。こちらへ」

「そっち、入口じゃないですか？」

「桜は隣の隣の家ですので」  
「えっ！？値段は？」  
「松の2倍と聞いたところでしょうか」  
「松の値段は？」  
「4名様で1日50000ギルです」  
「てことは、1日100000ギルか」  
「さあ着きましたよ」

目の前には1階建ての家があった

「ここが今日の寝るところ？」  
「そうだぞ、汚さないようにな」  
「僕そんなに幼くないよ」  
「では代金を」  
「何日泊るんだ？」  
「2日ぐらいがいいな」  
「そうですね、ゆっくりしたいですし」  
「なら、20000ギルですね。パーティー証をお持ちですか？」  
「持ってるぞ」  
「なら20%引きで16000ギルです」  
「よっと、これでちようどか？」  
「確かに16000ギル頂戴しました。それではこれが鍵です、こゆっくり」

.....桜の間・リビング  
「さてと着いたがまず、部屋割りを決める」  
リュウがそう話を切り出す

「ふかふかだよコレすこいすこい！」

ソファ―にダイブするゼウス

「話を聞け!」ゴンツ

「いったーなにも拳骨しなくてもいいじゃんよぉ」

「で部屋割りとはどういうことだ?」

レナが不思議そうな顔で聞き返す

「俺たちは4人だが個室は3つだ、だから2人の部屋と1人の部屋を二つ決める」

「わたくしはできれば1人がいいですわ」

「私もなるべくなら1人がいい」

「ゼウスは?」

「僕はリュウと一緒にいいよ、てゆうか一緒にじゃないとやだ」ギユツ  
「わかったから、抱きつくな」

「次はだれがどの部屋にするかだが、俺たちは広めの奥の部屋を使  
つていいか?」

「いいですよ」

「いいぞ別に」

「じゃあ二人はどっちが手前とリビングの奥を使うか決めてくれ」

「じゃあ、私にご飯を作るからリビングの奥でいいか?アリア」

「それで、かまいませんわ」

「今日は私が買い出しに行くってくるから休んでてくれ」

「あ、わたくしも行きますわ」

「そうか、じゃあお言葉に甘えさせてもらおう」

「ああ、行ってくる」

「行ってきますわ」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃーい」

ガチャ、バタン

「じゃあ、部屋に行くか」  
「そうしよ〜」

.....リュウとゼウスの部屋

「ベットが一つだけってどういうことだよ」  
部屋を見てうなだれるリュウ

「机と椅子もあるよ〜」

「そういうことじゃない」

「テレビもあるよ〜」

「だから、そうゆうことじゃねえ。二人で一緒に寝ることになるだ  
ろ」

「僕は別にいいよ〜、てゆうより一人じゃ寝れない」

「お前神様だろ、なんか怖いのか？」

「ちがうよ、リュウと一緒になのに一人で寝ることがだよ」

「んーよくわからんが、寂しいのな」

「そうゆうこと、じゃ僕トイレ行ってくるね」

「もどつたよ〜」

「ゼウスかこつち来いよ」

リュウがベットの上で胡坐をかきながら手招きをする

「どうしたの？」

ゼウスがそばによる

「ほらここ座れよ、約束したろ、抱っこじゃないけど膝の上で我慢  
してくれ」ポンポン

リュウが膝の上を叩く

「うんっ、全然いいよむしろこっちのがいいかも!」トスッ  
ゼウスがリュウに向かい合うようにして膝に座る

「お前小さいな」(あごの下に収まるって結構小さいんじゃないか?)

「リュウが小さい方がいいって」ギユッ

ゼウスがリュウの背中に手を回す

「そんな風にいったかな?」ナデナデ(なんか小さい妹みたいでかわいいな)

「うにゃ／＼、いったよ」(気持ちいいな)

「そうだったかな?」ナデナデ ギユッ

「うん／＼」(リュウの方からギユッしてくるなんて嬉しいな)

「そうか」ナデナデ(こいつ暖かいな)

「リュウっていい匂いだね」スーハー

「そうか?香水とかは付けてないけどな」ナデナデ

「うん、なんてゆうか落ちつく匂い」

「そうなのか」

「そうだよ、あとさお願いがあるんだけど、いい?」

上目づかいで見上げるゼウス

「さっきのゲンコツはやりすぎたと思うからいいぞ、なんだ?」(あぶねー、一瞬ときめいちゃったよ)

「あのね、寝転がってね、ギユッして?」

「ぐっ、それは…」(さすがに妹みたいっていつてもそれはちょっと)

「さつきいいぞって言ったのに、うそつきい」ウルウル  
「くっ、しゃーなーいいぞ」「ゴロン」（涙を見せられたら断われね  
ーだろ男として）

「やったあ、うでまくらだ、うでまくら」「ゴロン」

「これでいいか？」ギョッ

「ふわあ／＼／気持ちいいな」ギョッ ウトウト

「眠いのか？」ナデナデ

「ん、ねむい」ウツラウツラ

「寝ていいぞ」ナデナデ

「やだ」

「なんでだ？」ナデナデ

「リュウがどうかいっちゃん気がして」ギョッ

「そんなことしねーから、寝てもいいぞ俺はここにいるからな」ギ  
ョッ

「う、ん、わ…かつ…た」コテン

「寝たか、俺も寝ようかな、お休みゼウス」

… … … 数十分後

「んん、ふあー、ゼウスは？」チラ

「スー、スー」

「まだ寝てるか。ちょっとトイレ、っと」ゴソゴソ

「んっ」ギョッ

「大丈夫すぐ戻るよ」ナデナデ

ギイ、バタン

「ふー、スッキリした。ん？」

グスッ… … グス… … トテトテ

ドアの向こうから泣き声のようなものと足音が聞こえる

「まさかな…」ガチャ、バタン、

リュウがドアを開け部屋に入ると

泣き顔で部屋をさまよっているゼウスがいた

「あたっちゃったよ、ゼウスどうしたんだ？」タタッ  
ゼウスの傍に歩み寄る

「グスツリュ…ウ？リュウウ…」ギユツ  
ゼウスがリュウウへ抱きつく

「どうしたんだよ？泣いて、何かあったのか？」ナデナデ  
優しく、あやすように、ゼウスの後頭部を撫でる

「だって、起きたらリュウウがグスツいないんグスツだもん。絶対に  
グスツ居なくならないうって言ったのに」

泣いて赤くなり、うるんだ瞳で見上げるゼウス

「ごめんな、勝手にいなくなつて」ナデナデ

「怖い夢だつてさグスツ、見て起きたのにグスツ、リュウがいない  
んだもん」

「悪かったな、許してくれ」ポンポン

「じゃあさ、今日ずっと一緒にいて？抱っこしてて？」

「いいぞ、ほんとにごめんな」ギユツ（やたらと甘えてくるな）

「抱っこして？」

両手をあげて抱っこをねだってくる

「はいよ、よいしょっと」「ヒョイッ

「もう離れないよ」ギユツ



強く抱きついてくる

「さつき見たいに座っていいか？」ナデナデ（髪、綺麗だな）  
「いいよ〜、ギュッとしてくれるなら何でもいいよ」「ギュッ

ゼウスを抱きかかえたままさつきのようにベッドに座る

「えへへ〜、リュウって暖かいんだね」

「お前もあつたかいぞ」

「気持ちいいな。んふふ〜」「ギュッ

さつきにも増してゼウスがくっついてくる

（何でもくっつきすぎじゃないか？まだレナとアリアは帰ってこないのか？）

その2に続く

## 第2の町・ウィルディア（後書き）

なんか収集がつかなくなったので

こんなところで続きとしようです

中途半端で済みません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6656x/>

---

俺が神と出会ってから

2011年11月2日03時11分発行